

投稿**文化を守るため、劇団への公的支援を！**

前進座の上沢美咲です。私はこう見えなくても(どう見えているのでしょうか?……) 幼い頃は引っ込み思案で友達の輪の中に入るのが苦手でした。ところが授業中に指名されて教科書を音読すると生き生きと大きな声で読むことが出来ました。

クラスみんなが共感してくれているのを肌で感じると、次はもっと工夫して読んでみようと思いがわき自信も持てました。今にして思えば舞台俳優を志したのはこの幼い頃の体験が原点ではないかと思えます。生の舞台の醍醐味は演ずる側と観客が、劇場という同じ空間で感動を共有するところにあります。

前進座は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、五月国立劇場公演の中止を決定しました。現在劇団員は基本自宅待機、公演中止に伴うチケット代払い戻し作業などをごく限られた人数で行っています。前進座の国立劇場公演は30年以上継続している恒例公演が劇団活動の大きな柱です。中止の決断は断腸の思いでした。演目は3本立て、舞踊『操り三番叟』・『俊寛』・『たが屋の金太』どれをとっても魅力ある私自身が楽しみにしていた演目で、こうして原稿を書いている今日5月9日は初日を迎えていたはずでした。やりきれない気持ちです。

●公演が経費回収の唯一の手段、フリーの仲間たちのくらしも深刻

公演を行えない＝収入がなくなる。一年以上掛けて準備してきた経費の回収も出来ず資金繰りに苦慮しています。止められたら完全ストップするしかないのが舞台芸術です。前進座は全員が「給料制」です。日本の劇団で俳優も含めて給料制を取り入れている例は他にありませんが、今この仕組みを維持できるどうかの瀬戸際に立たされています。

前進座は1931年昭和6年、当時の歌舞伎界の門閥制度や因習に反対したメンバーで創立され、以来89年間民主的な運営を貫いています。同じ仕事をしている仲間同士で家柄などによって格差があるのはおかしい、劇団員同士平等に支え合い、自主独立の運営をすることで観客の共感を得る芝居を届けられる。故中村梅之助先輩がお茶の間のスターになっても劇団代表として私たちに牽引し続けたのは、前進座にしか出来ない芝居があるという信念があったからだと思えます。

前に進むしかないんだから「前進座」と命名してくださった、村山知義先生は後に東京芸術座の主宰者となった劇作家であり演出家です。今ある新劇団はどこかで繋がりながら、それぞれの特長を活かした作品創りをしている同士です。ひとつとして欠けて欲しくない…力を合わせて声を上げ続けなくてはなりません。

フリーの俳優仲間たちの中には、コロナウイルスの影響で仕事がキャンセルになっても主催者にギャラを支払ってほしいとは言えないでいる人もいます。次の仕事への影響を考えて言い出せないのです。アルバイト先も休業になり求人を探しても当然在宅勤務とは行かず、そもそも感染拡大防止のために公演が中止になった訳ですが、生活のため慣れない環境のバイト先へ出向く矛盾、感染リスクと戦っています。劇団員もフリーの俳優もみんな納税しています。等しい生活の補償を望みます。

●「劇場閉鎖は演劇の死……」かみしめたい

4月22日に放映されたNHKクローズアップ現代「イベント自粛の波紋 文化を守れるか」は、40分の放送時間で音楽演劇美術アニメに至るまですべてのジャンルをまとめざるを得なかったため、消化不良の部分もありましたが、日本において芸術家たちを苦しめている現状は伝えてくれました。

3月初めに演出家野田秀樹さんが「劇場閉鎖は演劇の死」として意見書を出したことにネット上などで中傷が多かったことには、私のように演劇に自身の居場所を見いだした人間はたいそう驚きました。

日本では舞台芸術を生み出すためのあらゆる経費は基本的に観客が支払わねばならず、演劇が身近な日常になりきれていない理由のひとつには高額な観劇料問題もあるのでしょうか。元々脆弱だった部分をコロナウ

イルス問題は直撃しているのです。クローズアップ現代番組の最後に演出家の宮本亜門さんが発した「一番怖いのは文化に携わる人が自分で自分を否定してしまうこと…」この言葉に泣けてしまいました。

ありがたいことに今回のことで前進座にはお客様から励ましの言葉が多く寄せられ、「チケット代は寄附するよ」という方も多かったのです。最近文化庁よりチケットを払い戻さず寄附することにより税優遇を受けられる制度が新設されたことが発表されお申し出のあったお客様にはそのご案内もしているところですが、公演が出来ずに収入がない状態がいつまで続くのか先が見えません。

来年の前進座創立 90 周年に当たり、今回中止にした 3 本立てを五月国立劇場公演で周年記念演目として上演することを目標としていますが、その時まで劇団を維持できるのかという問題に直面しています。

とは言え、俳優が自分を否定せず諦めずにひとりで出来ることはたくさんあります。キンキン体操、筋トレ、日本舞踊、長唄、発声、台本読み、音楽鑑賞、落語鑑賞、映画鑑賞、読書、調べ物…。さて、キンキン体操って何？と思われた方、晴れて皆様と再会出来た暁にはご説明したいと思います。それまでどうぞお元気で。前を向いている前進座の俳優たちの様子は、前進座のホームページで随時アップされていますので是非楽しんでください。一緒に頑張りましょう。

(前進座・上沢美咲)

本当に叩くべきは経済優先の政治の方針

青年劇場の湯本です。

「通信」読ませていただきました。ありがとうございます。また文化、芸術に対する助成の必要性などを掲げて頂き、非常に心強く励まされる思いです。今大変じゃない人はいないと思いますが、演劇が置かれている現状をご報告できればと思います。

青年劇場では、5月22日から公演を予定していましたが、やむなく延期することにしました。また学校が休校になったため6月の学校巡演も延期となり、演劇講師の仕事も休止を余儀なくされました。

感染拡大当初、ライブハウスでクラスターが発生したことで、会場機構が違うにもかかわらず音楽や演劇の劇場も危険という雰囲気の流れ、3月にはかなりの公演が延期または中止となりました。かろうじて上演できたところも大きく観客数を減らしました。小劇場系と言われる、若く小さな劇団は主宰者が1人で借金を背負うという事態が起こっています。

● 「文化」に対する助成は諸外国に比べて少なすぎる

また飲食店などアルバイトが激減したため、生活面で不安を抱えている人も多いようです。そして何よりも辛いのは、コミュニケーションを軸とする演劇がコミュニケーションを絶たなければならないということです。

劇団の収入はチケット代と上演料です。儲けようと思っただけではないので、常に自転車操業と言ってもいいでしょう。そこが今持続すら危ぶまれる状態になっています。元々日本では諸外国に比べて文化に対する助成が少ないです。

そこで演劇関係者が、政府に補償、助成をしてほしいと声を上げましたが、応援のメッセージが届く一方で、ネットでは「みんなが大変なのに、傲慢だ」などと弱いものが弱いものを叩く意見も散見されます。本当に叩くべきは、経済優先の政府の方針のもと、削られた医療福祉制度や大企業の優遇税制だし、年々膨れ上がる軍事費や大企業の膨大な内部留保は、明日に不安を抱えている人たちにすぐに回すべきと考えます。

皆さんと一緒に声を上げ、この格差社会を変えていきたい、なんとかこの状況を生き延び、社会の鏡となる芝居をまた生み出していきたいと思っています。また元気にお会いできる日を楽しみにしています。

(青年劇場・湯本弘美)